

学校法人河合塾（名古屋  
市千種区）の理事長河合斌  
人（あやと）さん（右）が、

河合 斌人  
河合塾理事長



フランスの教育功労者に贈  
られる「パルム・アカデミ  
ック・オフィシエ勲章」を  
受章することが二十三日ま

## 教育功労で 仏から勲章

でに決まった。河合さんが設立され、学問研究の場を上げた没後二百年記念のシンポジウム（八四年）の内、目指すとともに、当初から文化活動の支援に力を入れ、所が数回にわたって日仏の国際シンポジウムを開き、関係では「仏精神分析学者」に選ばれた。

### 河合塾の河合斌人理事長

両国の相互理解に果たした功績が認められた。授与式は二月九日、東京で行われる。同研究所は一九八四年に「仏革命と文」などの対話、学一など、日仏の研究者に、フランスの学術、文化研究をよる五つの国際シンポジウムを開催、協賛。十八世紀末の思想家ディドロを取り、紹介し、貢献した個人に贈り、受章は大変名誉なことと喜んでい

る。同研究所は一九八四年に末の思想家ディドロを取り、紹介し、貢献した個人に贈り、受章は大変名誉なことと喜んでい

も学者で、それ以外では初めという。

授与式ではエンキン駐日仏大使も出席する予定。河合さんは「研究所は総合教育機関を目指すためのシンボルとして設立し、国際性、文化性、情報性を重視して活動してきた。ことしは塾創立六十周年でもあり、受章は大変名誉なことと喜んでい



東京商科大卒。日本興業銀行入社。ロンドン駐在員を勤め、帰国後山一証券に出向し、副社長などを歴任。1983年河合塾理事長に。74歳。

フランスからパルム・アカデミック・オフィシエ（教育功労）勲章を受ける

ひと

かわい けんじ  
河合 斌人さん

「塾の経営者という日陰者に外国から光が当たったということじゃないでしょうか。日本では絶対勲章なんてもらえませんがね」

大手予備校・河合塾の研究機関「河合文化教育研究所」の理事長として、日仏両国の文化交流に貢献したことが認められた。塾の経営者がフランス政府から教育功労勲章を受けるのは異例なこと。

父親の後を継ぎ理事長になったのが十年前。国際性、文化性、情報性の三つの理念を打ち出し「塾の頭脳」となる研究所を設立した。日仏教授らによる「フランス革命と文学」、学校外教育などをテーマにした仏ジャナリスト、日本の教育者による「ボンジュール学校 アデュー

学校」などのシンポジウムを開いてきた。

全国に予備校を建設。「受験のためだけに、弊害ばかりの塾と見られるのは困る。本当は手作りの人間教育を進めている」という自負がある。

「公教育が対応しきれない部分を補完している」「幼児教育、生涯教育など文部省に先行して新しい教育をやっている」「偏差値を振り回した私たちがまず偏差値教育を乗り越えないと」

教育を語り出すと身振り手振りが入り、冗舌になる。今後は予備校に生徒を集めるより、映像メディアなどで情報を世界に流す時代だという。「塾が滅亡することはない」と言い切った。

授与式は九日、東京で行われ（中島 伸也）



## フランス政府より理事長が受勲 —民間で初、文教研の活動に対して—

フランスの文化・学術研究を紹介し、相互理解、対話に貢献した個人に授与されるパルム・アカデミク・オフィシエ勲章（フランス教育功労勲章）。河合塾人河合塾理事長・河合文化教育研究所（以下文教研）所長に、去る二月九日、同勲章が授与された。受賞理由は文教研が開催・協賛した日仏国際シンポジウムへの高い評価である。授与式には海部俊樹前首相、森喜朗通産相ら政財界、関係者百七十余名が列席した。

「河合塾創立六十周年という意義ある年にこのような身に余る勲章をいただくことは感無量の気持ちです」と授与式の壇上で理事長は謝辞を述べた。河合塾として記念すべき年、予備校として量的拡大から質的充実が求められ、とりわけ教育環境が新しい学力観に基づく方向へ大きく変化しようとするこの時期、この受賞は象徴的な意味を持っているといえるだろう。

### 「将来に向け、勇気と自信を得た」と理事長

「今回の栄誉は、河合塾の将来に向けて強力な勇気と自信を与えていただいた。国際化、情報化そして文化性という大きな三つの新しい時代の命題にむけ、今後日本、フランスの青年のため、世界の青年のために努力と研究を継続することを腹に決めたい」と栄えある受賞を感謝して理事長は決意を明らかにした。

また、受賞の対象となったシンポジウムの中心的役割を担った中川久定京都大学教授に感謝したあと、文教研の活動について「河合塾は幼児教育から生涯教育



まで幅広い総合的な教育を推進してきた。とりわけ、その頂点に立ち、象徴としての学問の研究、国際的文化教育活動を進めてきた文教研のさらなる希望にむけ頑張りたい。今回の受賞は、それに関わった人たち全員の栄誉だろう」と述べた。

文教研が河合塾の付属機関として設立されたのは一九八四年十一月。感性の瑞穂しい青年に文化や教育の矛盾が表われるという問題意識を根底に据え、母体の河合塾が培ってきた豊富な経験をもとに現在の青年を取り巻く環境を立体的に研

究・解明することが目的。研究の対象としては、教育の基礎研究と既成のアカデミズムの枠を越えた学術研究があげられている。

今回の受賞の対象となったシンポジウムは次のとおり。

- 日本の心・フランスの心 '84・8
- フランス精神分析学者との対話—
- デイドロおよび十八世紀のヨーロッパと日本 '84・11
- 青年の現在（ヘバリー名古屋） '84・11
- フランス革命と文学 '89・10
- ボンジュール学校、アテュー学校 '90・10

文教研設立の契機にもなった十八世紀末の思想家デイドロの没後、三百年記念のシンポジウムの内容はフランス語版で出版され、中川教授の記念講演は河合ブツクレット『デイドロの（現代性）』解説（野剛）としてまとめられた。デイドロはある権威によって抑圧、排除されたものにこそ、それまでの価値を転覆する可能性がある。つまり正統性と称する権威の座につくものは、内的に空洞化する可能性をもつことになるという。

予備校と公教育という関係にとどまらず、様々な場面でそれまでの秩序の変動が進みつつある現在、今回の受賞の持つ意義は深いといえるだろう。

塾生対象の文化活動行事も多種多彩だ。十八歳という本来に瑞々しい感性を持った世代に対し何を伝えたいか。知的刺激を与え、好奇心を喚起し、現代社会の抱える様々な問題への意識を高める。そのような知的バックグラウンドの形成を目指し、教育が本来的に持っている自由を喪失した、大部分の公教育では成し得ない

ユニークな内容を展開してきたといえる。予備校としての受験的修練以外に意識的に行ってきたことのひとつだ。また、ある分野のオーソリティー、研究者の生の声を聞き、大学の進路や将来目指す方向に結びつけるようなものもある。

### 一段と必要性が増してきた 知的バックグラウンドの形成

「受験というものはある教科、たとえば英語ばかりやっても合格できません。現在世界で何が起っているか、ひとつの例としていえば、地球規模で起こっている環境問題など、そういったことに関心を少しでも持つことが大事なんです。そうすれば違った見方での考えをすることができるようになり、総合的な力の押し上げが重要であり、その傾向は今後も進むだろう」とある英語の講師はいう。

平均点が昨年より約十五点下がり、時間切れに泣いた受験者が多かったセンター試験の英語でも教科外の知識のあるなしが解答のスピードに影響を与えたと指摘するのは丹羽進学事業本部長。

「長文問題のうち、食糧自給率グラフの読み取りの問題、テレビなどメディアの存在は親が子に社会性を身につける対話の時間を奪うようになったという問題、いずれも普段、新聞や雑誌で話題になっていることであり、日常的に積み上げてゆく知的バックグラウンドの形成のあるなしが決定的だったのではないか」という。教科科目を越え、総合的な力を問う傾向は一般入試にも見られるが、最も顕著なのが小論文入試。環境、異文化、人権、臓器移植などの問題について自分なりの意見や経験を踏まえたうえで展開す

力が求められている。科学文明が急速な形で進んだ現在、身のまわりの自然、社会、人間を地球規模で想像できる人間を、社会も求め、またひとりひとりがそう在るべきだと要請されている時代ゆえだろうか。

## 強調される新しい学力観 進む新しい領域への試み

今回の新学習指導要領も「個性重視」とともに「新しい学力観」の育成が強調されている。暗記した量を競い合うのではなく、自分で問題を発見し、解決にむけて方法を組み立てる力を育成するというものだ。モノは与えられる、といった発想で育つ人間が多くなっていることに対する文部省や関係者の危機感も強い。そのため少産化時代到来を絶好のタイミングとして「個性化」「多様化」を基調とした「戦後最大の教育改革」は急激に進行している。高校進学率九六％を背景に多様な価値感をもった生徒が入学するとして、「総合学科」の'94年度導入などが進められつつある。例えば、学科・コースを越えて履修できる総合選択制高校は七県に十一校、埼玉の県立伊奈学園総合高校は百六十四の選択科目を揃えている。

学年区分のない、科目を自由に選べる単位制高校は二十二都道府県に三十六校あり、全日制高校も今春から設立される。また、高校の学科の名称は約五百種、そのため大学入試センターは'97年度から高校での選択拡大を入試に反映させる予定だ。このような自由カリキュラム、選択制という高校多様化の流れは周知のように、'94年度の高一生から漸次導入される新教育課程と軌を一にするものと思われる。

週五日制も改革のひとつ。一月中旬開かれた日教組の教育研究会では、埼玉県教委に端を発した業者テスト問題、偏差値教育は正、週五日制の実施状況などが討論され、激変する教育現場の声が報道されている。

新しい学力観は大方評価されたといえるものの、「自然・社会・生活」を体験させるための週五日制の取り組み方で紛糾する一幕があったという。

休みの過ごし方について子供に計画を立てさせ教師がアドバイスをするシステムを作ったとの報告に対し、「ぼーっとしている時間、問いと答えの間をうろうろする時間、自分を見詰め直す時間を子供から奪い管理するの？」との意見が出された。「管理したがる旧体質、抜けきれぬ教師たち」と報道されても仕方がない、従来の「生徒丸抱え・管理する」教師の貌がここでも見え隠れしている。

一方、予備校は従来から自由な発想と身軽なフットワークで新しい領域に対して果敢に取り組んできた。参加者が自ら学ぶ場を河合塾が提供しようとする特別セミナーもそのひとつ。アメリカ短期留学など、昨年夏の夏期特別セミナーに引き続き試行錯誤を重ねながら春期特別セミナーのメニューが用意された（下記参照）

法課程の開設も準備されている。他には中国への短期留学の計画。あるいは週五日制実施に応じた講演会、講座も動き始め、いくつか具体的な企画提案も先生からいただいている。

このように現在進行している教育環境の変化は河合塾が従来より進めてきたCSMOや文化行事と狙いが近いものもあり、その経験を自省しつつ一段と強力に押し進めていく時機が到来したといえるだろう（特別セミナーについて詳細は東京の教務企画へ）

## 春期特別セミナー

### ●天文学のすすめ（入門編）

——瞬く星々と夜空を彩る星座たち——

文字通り、初めて星空を観測する人でも容易に参加でき、天体に馴れ親しむことを目的としたコース。

場所は山梨県八ヶ岳南麓天文台・星の村。十二の天体観測所と公開天文台が併設され本格的な観測が行える。天体インストラクターによる解説、暗黒度の高さ、非常に高い晴天率等、天体観測の立地条件としては絶好である。

参加者が天体を撮影、現像するユニークなプログラムも準備されている。

### ●天文学をさぐる（上級編）

——最先端の宇宙論と天体観測——

すでに天体観測を経験している人を対象としており、より宇宙への理解を深める本格的なコース。

星の村に加え、野辺山宇宙電波観測所の見学と講義も予定されている。最先端の天文学理論の講演者は、東京三鷹の国立天文台、野辺山観測所の専門研究者、大型望遠鏡（星の村）を使用している二重星、星団、星雲、惑星等の観測により、知識による理解を実体験でより深くすることが狙い。各自が事前に設定した研究テーマを講義、観測、資料（書籍やビデオ）をもとに追究する。

立天文台、野辺山観測所の専門研究者、大型望遠鏡（星の村）を使用している二重星、星団、星雲、惑星等の観測により、知識による理解を実体験でより深くすることが狙い。各自が事前に設定した研究テーマを講義、観測、資料（書籍やビデオ）をもとに追究する。

●パズルで学ぶ現代数学  
——やさしいパズルからホンモノの数学へ——  
苦手意識をもたれがちな数学を、手を動かし、具体的な場合について「実験しながら理解しよう」というもの。

その実験は日常的によく行われる「コイン投げ」「あみだくじ」。あるいは「ひと筆描き」で遊んだり楽しみながら、「なぜそうなるのか」を考え、本来だれでも楽しめる数学の本質に迫っていく。

### ●サイエンスを読む

——科学トピックスを英語で楽しむ——

比較的身近な英文の科学論文雑誌を読みながら、科学的なものの考え方を理解しようというもの。

つまり、科学者による問題の設定、行った実験、発見に至る過程を知ることがこのコースの主眼となる。従来のいわゆる「常識」とされた理論を覆す新しい理論が生成される現場を直に接し、科学と英文を読み解く。

### ●欧米から見た日本

——新生アメリカの拓く日米関係——

国際化、情報化社会といわれて久しい。海外の人々は日本に何を望んでいるか、どんなイメージで見ているのか。実際英語誌を読んで考えようというもの。

具体的なテーマはアメリカの新大統領クリントンの対日戦略。それをいつまでも日本のマスコミ報道に頼らず、欧米の雑誌、新聞記事を自分の目と頭で確かめ、そこで浮き彫りにされる「日本の実像」を考えることが真の国際人に必要ではないだろうか、と講演者は提起している。

### ●超電導を学ぶ

——最先端技術とその可能性——

現代技術の最先端である超電導現象のメカニズムを、実験、講義、研究所見学を通じて体験しようとするもの。

見学を予定している超電導工学研究所の研究成果は世界的に高く評価され、今回はその最先端の研究現場における設備レベルを研究員の解説によって理解を深めていく。すでに中央リニア新幹線、断層撮影が可能とするCTスキャンなど実用化が進められつつある超電導。その可能性と最先端の研究状況を学ぶ。

### ●生態観察入門

——三浦半島／小網代の自然探索——

まず、森林・干潟・海岸に棲む生物の生態をじっくり観察することがこのコースの目的。そのうえで、自然保護・環境保全について考えようというもの。

フィールドは神奈川県三浦半島先端の小網代での干潟観察とボードウォーク、グ、油壺の海岸で潮溜りに生息する生物観察も予定されている。また東大理学部附属三崎臨海実験所見学を通じ、生物学研究の最先端にも触れることができる。

講師は第一線で活躍する生物学者であり、小網代を長年にわたりフィールドとしているナチュラリスト。